

氏名	BARDOT, Sonny Renaud Sully バルド, ソニー ルノー スリー	
学位の種類	博士(学術)	
学位記番号	甲 第 237号	
学位授与年月日	2023年3月24日	
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当	
学位論文題目	出生率と恋愛・結婚の関連性：徳之島での事例研究 Romantic Love and Marriage in Relation to Fertility Rate: a Case Study in Tokunoshima	
論文審査委員	主査	上級准教授 森木 美恵
	副査	准教授 アムール=マヤール, オリビエ
	副査	教授 加藤 恵津子

## 論文内容の要旨

日本の少子化問題について、今まで様々な政府の施策が導入されてきたものの、解決の糸口は未だ見えていない。本論文では、「(いつかは)結婚して子どもを持ちたい」と希望している日本人が9割近くいる統計結果を念頭に、「なぜ人々は結婚できないのか」ではなく「結婚して子どもを持ちたいという希望があるにもかかわらずそれが実現できないのはなぜか」という点に焦点を当てて、日本における低出生の構造的な要因を考察する。特に、従来の研究のように経済的要因やワーク・ライフ・バランスの問題といった「結婚後の理由」のみに着目するのではなく、カップルの出会いやデートのプロセスなど「結婚・妊娠前の理由」を解き明かすところに理論の枠組みとしての新しさがある。調査方法は参与観察と対面での反構造的インタビューを中心とするフィールドワークによるエスノグラフィックなもので、調査地は、日本において最も出生率が高い場所である鹿児島県の徳之島である。徳之島における恋愛と結婚および出生の関連について議論することで、出会いの場を豊富に提供する人のつながりがあり、また「子を持つこと」に男性、女性両者にとって前向きな社会的意味付けがされていることで、人々の妊娠・出産意欲が高く維持されていることを明らかにする。当然、祖父母からの援助や地域における物心両面での手助けなど子育てを支援する環境が備わっていることも徳之島の特徴であるが、その点よりも島の人々にとって「子を持つ」ことが生きる理由、がんばって生活をなりたいとする原動力となっていることも高い出生率を維持している理由である。

以下、序章に続き論文で展開された議論を章ごとにまとめる。

## 第一章 日本における低出生

日本における少子化の問題点を、主要な文献および政府の少子化対策案を参照して独自の観点から分析した。妊娠・出産の発生が難しい理由を結婚の「前」「後」の理由に分けて問題の所在を明確化して議論した。日本の合計特殊出生率が置換水準を下回る低さである主な要因は、結婚した夫婦の出生力が低すぎるからではなく、未婚率の高さであることは長らく指摘されてきているが、未婚率の高さを「結婚前の理由」として出会いとデートプロセスの面から取り扱う見方は今まで見過ごされてきた。また、女性自身もいわゆる「昭和結婚」（分業制にもとづく男性の経済力を重視した結婚）を望み続けていることが、現在の男性の経済力の低下によって結婚市場におけるミスマッチングを生み出している。さらに、ロマンティック・ラブ・イデオロギーを前提としながらも、男女の異性愛を推進する積極的行動が希薄であることも結婚（そして妊娠・出産）が発生しにくい理由のひとつである。以上から、経済的・政策的な理由のみならず、より重要なポイントとして、現実にはマッチしていない理想化された恋愛結婚像が維持されているために結婚ひいては出生が阻害されていると分析できる。

## 第二章 ロマンティック・ラブ・イデオロギーの解体

ロマンティック・ラブの概念について哲学、心理学、社会学、歴史学など人類学の近接分野の文献に依拠しながらロマンティック・ラブ・イデオロギーとは何かということ解体し、社会的構築物としての恋愛と結婚の姿を明らかにした。西欧の歴史においても結婚とは機能的なものであり、愛と結婚の結びつきは近年のものである。また、現代の恋愛は個人主義をベースとした消費者主義とも結びついている。日本において婚外子の割合は2%程度と継続して非常に低く、個人同士の恋愛の結果としての結婚が中心である西欧と比べて、日本における結婚は子どもを前提とした側面が強いことが見て取れる。

## 第三章 調査地徳之島の紹介

本章はフィールドワークを実施した徳之島の地理・歴史的背景に関するものである。徳之島は奄美群島の島だが、台湾、沖縄、鹿児島の影響を受けて複雑な社会的アイデンティティを形成してきた。また、第二次世界大戦後はアメリカの占領下にあったこともあり、「本土」との心理的・経済的距離感が存在してきた。このような背景の中で、徳之島は本土と比較したときに特徴的な人口学的、文化的様相を示している。例えば、合計特殊出生率や離婚率・再婚率の高さがそのひとつである。一方で高齢化など本土と共通した人口動態も見られる。経済的には本土と比べて低調であることは確かで、島で得ることができる仕事は農業関連のものと低技能職が主要なものである。

#### 第四章 フィールドワークと調査方法

本研究は約5か月間の徳之島でのフィールドワークの結果である（2019年の予備調査、2021年8月から11月の本調査、2022年3月の追加調査）。フィールドワーク中に合計49名（29名の女性、20名の男性）の録音でのインデプス半構造化インタビューと9回のディスカッションセッションを実施した。参加者の最小年齢は21歳、最長年齢は74歳、29名が有配偶者、17名が未婚者、1名が未亡人であった。第一子誕生の年齢は16歳から40歳と幅広い。平均子ども数は2.1名と島平均より低いが、それはサンプルに島外からの移住者が数名含まれている影響だと考えられる。参加者のリクルートにはスノーボールサンプリングを使用した。なるべく多様な層からのインフォーマントを確保するために、最初にインタビューをする人の属性がばらけるように特に配慮した。本章では、調査者自身の属性、日本語を話す白人の若年男性、が調査にあたる影響についても分析した。シュノーケリング、BBQ、闘牛などのイベントに招待されたり、芋畑で収穫のアルバイトを紹介されたりなど調査者は島民に友好的に受け入れられた。それは島民の「外国人」に対する親切心のおかげであるが、そのみではなく、筆者の育った家庭環境（母親のルーツがベトナム人であり比較的労働者階級）によるハビトゥスによって徳之島の住民に馴染みやすかったことも理由であり、それゆえに、調査がスムーズに実施できたと考察できる。調査において難しかった点は無口であるかまたは常に冗談めいて回答をしがちな男性にインタビューを実施することであった。

#### 第五章 子宝の島：徳之島における必要不可欠なものとしての子どもの存在

本章では、「子は宝」と徳之島でよく言われるその言葉の意味について、出生率の高さの観点からインタビューデータを基に解き明かした。まず、徳之島は子育てがしやすい環境であると言われているが、「なんとかなる精神」で地域や祖父母からの手助けによって経済的に余裕はないなかであっても、多くの子どもを育てることに負担感は少ないことが明らかになった。それは、島の人々にとって子どもがいる生活こそが人生を生きる意味であり、子どもがいたからこそ「まともに生きていられる＝がんばることができる」といったインタビューで繰り返し見られた発言にも反映されている。つまり、「子は宝」だからこそ、その得難いもののために人生の焦点を定めているのである。また、現実的に高校卒業後の進路の選択の幅が狭い女性たちについては、卒業後早いうちに母親になることこそが有益な人生のキャリアの道筋であることも判明した。さらに、男性たちについても男性性の表現のひとつとして多くの子どもを持つことが地域社会やピアからも期待されており、子沢山であることが男性性の証明としてインフォーマントに内面化されていると考察できる。

## 第六章 徳之島における恋愛、結婚、ジェンダーの関係

徳之島においてはいわゆる「でき婚」のケースが多い。本章では恋愛と家族形成の強いつながりについて論じた。島において結婚に結びつかない恋愛は「ゴールレス」とされ、恋愛そのものが目的ではなく、結婚とそこでの家族形成へのツールとして機能していることが女性たちの語りから明らかになった。それゆえ、学生の間は避妊を積極的に使用するカップルも卒業後は避妊を止めるなど、「でき婚」は人生における突発的なエラーではなく意識的な選択であり、恋愛関係を結婚へとつなげるセメントのような役割を果たしていることが判明した。また、物質的な条件が整わない島の環境であっても、夜間のドライブなどロマンスを促進する条件を満たしたデートを島人は行っており、そのようなデートを通して性交、妊娠、結婚、出産という道筋が若者にとって存在していることを指摘している。しかし、「でき婚」をきっかけとした家族形成は「賭け」であることも事実であり、若年結婚、離婚、再婚のライフストーリーは、恋愛と妊娠・結婚のつながりの強さと同時に、妊娠とその後の家族維持の脆弱さも示している。さらに、そもそもの恋愛につながる男女の出会いについては、島に高校が2校あることも影響して同級生ネットワークによって恋愛相手候補の紹介がスムーズに行われる環境であることも論じた。

## 終章 結論

結論では、本土において結婚へのハードルが高い理由を徳之島のフィールドワークから得た知見をもとに5つの観点から論じた。徳之島において恋愛関係が発生しやすい背景には、同級生や地域ネットワークが提供する密な人間関係が根底にあり、第一に「出会い」の環境が用意されていることがある。次に、都会と比べてきらびやかなデートの場所やデート資金が欠如したなかでも、ロマンスが発生しやすいデート方法をローカルの文脈で工夫しており、出会いから恋愛関係を深めるプロセスが充実していることがある。そして最後に、恋愛を恋愛で終結させるのではなく、結婚および子どもにつなげることが目的であることによって、結果として出生率の高さが維持されていると指摘できる。徳之島の事例をそのまま本土に適用することは難しい面も多くあるが、他の田舎の地域などにおいては参照事例とすることができると考える。

## 論文審査結果の要旨

ソニー・ルノスリー・バルド氏の博士学位請求論文審査は、2023年1月12日(木)、午後1時50分より約2時間20分行われた。審査はZoomを使用してオンライン形式で実施された。審査委員会は、ICU専任教員である森木美恵上級准教授(人類学、主査)、加藤恵津子教授(人類学)、オリビエ・アムール=マヤール准教授(文学)の3名

編成であった。

審査では、まずバルドー氏が約1時間で論文全体の概略と結果のハイライトをパワーポイントスライドを用いて説明した。その後、各審査委員による質疑およびコメントのセッションを行った。

まず、加藤委員からバルドー氏の論文が、外国人の調査者が日本を対象にして研究をする際に行いがちな、日本を「ロマンティサイズ」することなく、ホリスティックな視点で調査を行った点を評価するとのコメントがあった。次に、論文全般において島における社会的差異や格差についての言及が少ない点についての質問があった。さらに、子宝の概念がDVの一要因となっているとの考察について、本質的な要因は家父長制またはマスキュリニティの働きではないかという質問もなされた。また、日本の歴史に関する事実誤認の箇所があるので確認するようにとの指摘があった。これらの質問に対してバルドー氏は、調査対象の属性を最大限多様化させる努力は行ったが、調査期間などの制約によりデータとして社会階層の偏りがある点は認めつつ、調査の特性上、島に残っていない人々にはアクセスできていないことがデータの同質性に寄与している可能性についてもディスカッションを行った。子宝の概念については脚注にて家父長制との関係について記載したことにふれつつ補足説明を行った。

アムール=マヤール委員からは、基本的には草稿に十分に修正が加えられ、文章としても満足ができる出来になっているため重大な質問事項は見当たらないとの肯定的見解が示された。そのうえで、子どもがカップルの「かすがい」となっているという分析結果について、そのことと島における離婚率の高さについて、質問があった。また、今後の調査の展望について、本調査結果と他の日本の地域との比較が重要であろうとのアドバイスがなされた。「子はかすがい」と離婚率の高さの問題については、実際に調査地に赴いた経験がある主査の見解を含めて、「子どもができる」という事象は交際している状態から結婚への道筋においての「セメント（カップル関係を正式なものにするつながら）」になっているが、そのことと生涯にわたる「かすがい」は必ずしも一致しないのではないかとディスカッションがあった。

最後に森木からは、論文全体を通して島の出生率の高さを説明する有効なストーリー展開ができており、オリジナリティのある論文が完成したとの言及があった。質問事項としては結論で唐突にワーク・ライフ・バランスに特化した議論があるためその意義について確認がなされた。また、同級生ネットワークの緊密さが島における「出会い」の容易さを担保している点についてそもそも男性同士、女性同士の高校卒業後も続く密な人間関係が重要な要因であるのではないかと指摘がなされた。

バルドー氏のズームからの退出後、審査委員3名で協議を行い、全会一致で本論文は学位（博士）授与に十分値する論文であるとの結論に達した（「A」評価）。まず本論文は、徳之島を事例として出生率と恋愛・結婚の関連性について独自の視点で議論展開

を行い、日本の低出生問題のみならず恋愛・結婚規範のほころびによって出生に影響が  
でている他の地域にも示唆を与える高い学問的・社会的意義を有する研究である。今ま  
で人口学の分野ではあまり議論されてこなかった「ロマンティック・ラブ」という概念  
について多様な観点からその内容を分解して人口現象を読み解くツールとした点が特  
に独創的であった。また、エスノグラフィックな調査において重要な点である調査対象  
者とラポールを築くという点において、日本語の流暢さの利点を超えて、バルドー氏が  
類まれな才能を発揮した点も高く評価できる。コロナ禍の中での調査であり困難な点  
は多くあったにも関わらず、バルドー氏が辛抱強く徳之島の方々と信頼関係を築いてきた  
ことは明らかである。論文での記述にもあるように自身の人口属性を客観的に見極めて  
調査にのぞんだ姿勢も今後のフィールドワーカーとしての資質として重要な点である。

昨年9月提出の「最終草稿」に全委員が満足する修正が十分に加えられていたため、  
委員会として満場一致で今回の博士学位請求論文を承認した。さらに、委員全体の見解  
として、バルドー氏が調査を通して調査者としての学問と調査対象者に対する誠実さを  
示し続けた点を高く評価し、今後独立した研究者として活躍する資質が十分にあること  
を確認した。

なお、最終原稿・データの作成にあたっては、審査委員から指摘された誤記その他原  
稿の形式・体裁・フォーマットに関する修正を行うこととし、細かい点については後日  
各委員から直接コメントを受け取ることとなった。

Name	BARDOT, Sonny Renaud Sully
Degree	Doctor of Philosophy
Diploma Number	甲( <i>Type-Kou</i> ) No. 237
Date of Commencement	March 24 <sup>th</sup> , 2023
Requirement of Degree	ICU University Regulation Article 4-1
Title of Dissertation	Romantic Love and Marriage in Relation to Fertility Rate: a Case Study in Tokunoshima 出生率と恋愛・結婚の関連性：徳之島での事例研究
Committee Members	Chair Senior Associate Professor MORIKI, Yoshie Reader Associate Professor AMMOUR-MAYEUR, Olivier Reader Professor KATO, Etsuko

---

### **Summary of the Dissertation**

Although various government measures have been introduced to deal with Japan's declining birthrate, there is still no concrete solution. Bearing in mind the fact that nearly 90% of Japanese people want to "(someday) get married and have children," this thesis focuses on why people cannot get married and have children, despite the desire to have a child. In particular, instead of focusing only on "post-marriage reasons," such as economic factors and work-life balance issues, as in previous studies, the thesis explores "pre-marriage/pre-pregnancy reasons," such as couples' matchmaking and dating processes. The novelty of the theoretical framework lies in the elucidation of these issues. The survey method is ethnographic-based fieldwork centered on participant observation and face-to-face semi-structural interviews. The fieldwork area is Tokunoshima in Kagoshima Prefecture, which has the highest birth rate in Japan. Discussing the relationship between love, marriage, and childbirth in Tokunoshima suggests that there are human connections that provide opportunities for men-women interactions, and that "having children" has positive social implications for both men and women. It was clarified that people's willingness to become pregnant and give birth is maintained at a high level. Of course, Tokunoshima is also characterized by having an environment that supports child-rearing, such as support from grandparents and local help, both materially and mentally. It turned out that having children is the driving force behind the high fertility rate, considered an additional motivation to work hard and to make a living.

The discussions developed in the thesis are summarized for each chapter as follows.

#### Chapter 1 Low fertility in Japan

The author analyzes the problem of the declining birth rate in Japan from a unique perspective by referring to impactful literature and the government's countermeasures against the declining birth rate. He divides the reasons why pregnancy and childbirth are difficult into "before" and "after" marriage and clarifies and discusses the fundamental problems. It has long been pointed out that the main factor behind Japan's low total fertility rate, which is below the replacement level, is not the low fertility of married couples, but the high rate of never-married people. The view that treats high rates as 'premarital reasons' in terms of the encounter and dating process has been overlooked until now. In addition, women themselves continue to desire the so-called "Showa marriage" (a marriage that emphasizes men's economic power based on the division of labor), which is creating a mismatch in the marriage market due to the current decline in men's economic power. Furthermore, one of the reasons why marriage (and pregnancy and childbirth) is less likely to occur is that there is little positive action to promote heterosexual interactions between men and women, even though it is based on the ideology of romantic love. Based on the above, the chapter analyzes that beyond economic and political reasons, the maintenance of an idealized image of a love marriage that does not match reality is, more importantly, preventing marriage and, in turn, childbirth.

#### Chapter 2 Deconstruction of Romantic Love Ideology

The chapter deconstructs what the romantic love ideology is, and examines love and marriage as a social construct while relying on literature in the fields related to anthropology such as philosophy, psychology, sociology, and history. In Western history, marriage has a functional role, and the link between love and marriage is recent. Modern love is also linked to individualism-based consumerism. Regarding Japan, the number of children born out of wedlock is very low (about 2 percent) indicating that marriage is often viewed as a premise for having children.

#### Chapter 3 Introduction of the fieldwork: Tokunoshima island

This chapter is about the geographic and historical background of Tokunoshima, where fieldwork was conducted. Tokunoshima is part of the Amami archipelago but has developed a complex social identity influenced by Taiwan,



Okinawa, and Kagoshima. In addition, after World War II, under American occupation, there was a sense of psychological and economic distance from the “mainland.” In this ambivalent context, Tokunoshima exhibits a distinctive demographic and cultural aspect compared to the mainland. For example, the high total fertility rate, the divorce rate, and the remarriage rate are among them. On the other hand, demographic trends common to the mainland, such as an aging population, can also be seen. The economy is certainly weaker than on the mainland, and jobs available on the islands are predominantly agricultural and low-skilled.

#### Chapter 4 Fieldwork and Methodology

This research results from about five months of fieldwork on Tokunoshima (preliminary research in 2019, main research from August to November 2021, and additional data collection in March 2022). A total of 49 (29 female, 20 male) recorded in-depth semi-structured interviews and 9 discussion sessions were conducted during the fieldwork. The minimum age of participants was 21 years, and the maximum age was 74 years, 29 were married, 17 were unmarried, and 1 was a widow. The age at which the first child was born ranges from 16 to 40. The average number of children is 2.1, which is lower than the island average, but this is thought to be due to the inclusion of several immigrants from outside the island in the sample. Snowball sampling was used to recruit participants, but a special effort to ensure that the profile of the people interviewed was dispersed in order to secure informants as diverse as possible. In this chapter, the author also analyzed the influence of the surveyor’s own attributes, a Japanese-speaking white young male. Invited to events such as snorkeling, BBQ, and bullfighting, and being introduced to a part-time job harvesting sweet potatoes, he was warmly received by the islanders. This is due to the kindness of the islanders towards “foreigners”, but it is also because of the home environment in which he grew up (his mother with Vietnamese roots and is relatively working-class). A difficult aspect of the study was conducting interviews with men who tended to be rather quiet or joking around.

#### Chapter 5 the *kodakara* Island: The Presence of Children as an Essential Aspect of Tokunoshima

In this chapter, the author analyzed interview data to investigate the meaning of the phrase, “*kodakara*” or “Children are treasures,” which is often said in Tokunoshima when it comes to the high birth rate. First of all, Tokunoshima is said to be an environment where it is easy to raise children. This is reflected in the remarks

repeatedly seen in interviews that, for the people of the island, children are the meaning of life, and it is because they have children that they are able to “live a decent life (be able to work hard).” Even though they do not have strong economic resources to raise them, they still consider having children the priority before thinking of material issues, in what the author calls the “nantokanaru spirit.” In other words, children are treasures, and that is why they focus their lives on them. The author also found that becoming a mother early after graduating was an alternative life and career path for women who realistically had a narrow range of options after high school. Furthermore, regarding men, having many children is expected by local communities and peers as an expression of masculinity, and having many children is internalized by informants as evidence of masculinity.

#### Chapter 6 Romance, Marriage, and Gender Relationships in Tokunoshima

In Tokunoshima, there are many cases of so-called “bullet marriages.” This chapter discusses the vital link between love and family formation. On the island, love that does not lead to a marriage is considered “goalless,” and it became clear from the stories of the women that love is not the goal itself, but functions as a tool for marriage and the formation of a family. Therefore, couples who actively used contraception during their studies stopped using contraception after graduation. It turns out that children act like cement that holds young couples together. In addition, even in an island environment where ideal conditions to date are not met, islanders go on dates that still meet the conditions to promote romance, such as night drives. The author points out that young people access dates that result in sexual intercourse, pregnancy, marriage, and childbirth through dating. However, it is also true that family formation triggered by “bullet marriage” is “gambling,” and the life stories of early marriage, divorce, and remarriage are not only about the strength of the connection between love and pregnancy/marriage but also about vulnerability of the connection between pregnancy and the aftermath. Furthermore, regarding the encounters between men and women that lead to romance in the first place, the author argues that the introduction of potential romantic partners is facilitated by the classmate network, which is influenced by the fact that there are two high schools on the island.

#### Final Chapter Conclusion

In the conclusion, the author discusses the reasons why the hurdles to marriage are high on the mainland from five perspectives based on the research results obtained from fieldwork in Tokunoshima. In Tokunoshima, close human relationships provided

by classmates and local networks are the underlying reason why romantic relationships are likely to occur. Secondly, despite the lack of glittering dating places and dating ways compared to the city, dating methods that facilitate romance are devised in the local context, and the process of deepening romantic relationships from encounters is substantial. Finally, it can be pointed out that the high fertility rate is maintained as a result of the goal being to lead to marriage and children, rather than considering love as a means for itself. There are many aspects that make it difficult to apply the Tokunoshima case directly to the mainland, but the author thinks it can be used as a reference case in other rural areas.

### **Summary of the Dissertation Evaluation**

The oral defense of Mr. Sonny Renaud Sully Bardot was held on Thursday, January 12, 2023, from 1:50 p.m. for approximately 2 hours and 20 minutes. The oral defense was conducted online using Zoom. The dissertation committee consisted of three ICU faculty members: senior associate professor Yoshie Moriki (anthropology, main advisor), professor Etsuko Kato (anthropology), and associate professor Olivier Ammour-Mayeur (literature).

In the defense process, Mr. Bardot first explained the outline of the entire thesis and the highlights of the results using PowerPoint slides for about an hour. This was followed by a question-and-answer/comment session by each committee member.

First, Professor Kato said that Mr. Bardot conducted research from a holistic perspective without “romanticizing” Japan, which foreign researchers tend to do when conducting research on Japan. She then asked questions about the relative lack of mention of social differences and disparities in the islands in the thesis as a whole. In addition, regarding the observation that the concept of *kodakara* is one of the factors in DV, she asked whether the essential factor of domestic violence was rather a patriarchy and masculinity. In addition, it was pointed out that there was a factual error regarding Japanese history, and advised him to check it. In response to these questions, Mr. Bardot replied that he made efforts to diversify the attributes of the informants as much as possible. The committee also discussed the possibility that the lack of access to people who did not remain on the island contributed to the homogeneity of the data. As for the concept of *kodakara*, he gave a supplementary explanation while referring to the footnote that describes the relationship with the patriarchy.

Professor Ammour-Mayeur expressed a positive view that the draft was sufficiently revised and the text was satisfactory, so there were no serious questions to

ask. He then questioned the analysis result that children are the “cement” of couples, and about the high divorce rate on the island. He also advised that it would be important to compare the results of this study with those of other regions in Japan regarding the prospects for future research. Concerning the relationships between children as the cement of couples and the high divorce rates, with the opinion of the chief examiner who has actually visited the fieldwork, it was discussed that the expression “children as cement (as a bond that formalizes the couple’s relationship)” is the step to marriage, it does not necessarily correspond to an event that bond the couple for a lifetime.

Finally, Professor Moriki commented that the entire paper was able to develop an effective story to explain the high fertility rates on the island and that the paper was completed with originality. As for the question items, she asked about intentions of specifically discussing work-life balance in conclusions as it was not particularly mentioned earlier. In addition, regarding the fact that the closeness of the classmate network guarantees the ease of “encountering” on the island, she pointed out that the close human relationships between men among them and women among them that continue after graduating from high school may be an important factor.

After Mr. Bardot’s departure from zoom, the three members of the committee held discussions and unanimously concluded that this thesis was sufficiently worthy of the conferment of a degree (Ph.D.) (with an “A” as evaluation). First, this paper discusses the relationship between the birth rate and love/marriage from a unique perspective, using Tokunoshima as a case study. This research is of high academic and social significance that also gives suggestions to other regions. The concept of “romantic love”, which has not been discussed much in the field of demography, was particularly original in that it was used as a tool to decipher the demographic phenomenon by decomposing its contents from various perspectives. In addition, Mr. Bardot’s ability to build rapport with research subjects, which is an important point in ethnographic research, goes beyond the advantage of fluency in Japanese and is highly commendable. It is clear that Mr. Bardot has patiently built a relationship of trust with the people of Tokunoshima, despite the fact that the research was conducted in the midst of the corona crisis and there were many difficulties. As described in the thesis, the attitude of objectively assessing one’s own demographic attributes is also an important aspect of future fieldworkers’ qualities.

As the final draft submitted in September last year had been sufficiently revised to satisfy all committee members, the committee unanimously approved the doctoral dissertation. In addition, the committee as a whole highly praised Mr. Bardot’s continuing efforts to show his scholarship as an investigator and his sincerity toward the research subjects throughout the investigation and expressed his full potential to play an active

role as an independent researcher in the future. In the preparation of the final manuscript and data, the committee decided to make corrections to the form, style, and format of the manuscript, including errors, pointed out by the reviewers.